「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿とは？」

２０２３．３．２０　大分県教育委員会

CASE 41

5歳児・1年生

「１年生やさしかったね。」
「僕も棒のところは、自分でできたよ。」

「ほら、見て！見て！あがったよ！」

一緒にやってみよう

「どっちからする？」

話をよく聞いて、自分で作るぞ！

「凧をつくってあそぼう！」
（幼小交流活動）

協力園・校
竹田市立南部幼稚園・
竹田市立南部小学校

（これまでの経緯）

12月。幼稚園では、『お正月』の歌をうたったり、『10ぴきのかえるのおしょうがつ』の絵本の読み聞かせをしたりする中で、「凧あげをしたいな」という思いが出され、「3学期になったら凧を作って凧あげをしようね」と話していました。一方、一年生も生活科の「きせつと　なかよし　ふゆ」（「きたかぜとあそぼう」）で凧あげをしたいと話し合っていました。園で凧を作った経験のある子どもたちも多く、自分たちで凧を作ってあげることにしました。「幼稚園生も凧を作るんだって」と聞いた一年生は、「教えてあげたいな」「一緒に作りたいな」という思いをもち、園児と一年生で一緒に凧を作って、あげることになりました。どちらも、交流会の日までに、凧の材料のビニールの色を選び、そこに、自分の好きな絵を描いて準備をしています。

一月。交流会の日。小学校のホールでのはじめの会が終わると、一年生教室前のワークスペースに移動しました。子どもたちの前には、凧の形をした大きなビニールが見本としてボードに貼られています。竹ひごを手にした保育者（以下幼稚園教員を保育者、小学校教員を教師と記載）から、凧の作り方について、説明が始まりました。子どもたちは、保育者と見本を見ながら、よく話を聞いています。保育者は、竹ひごの付け方を説明しながら、「ここは、友だちが手伝うといいかもね」と言葉を付け加えます。また、セロハンテープを貼る場面では、「何個付いてる？」と問いかけ、子どもたちも一緒に「一！2！3個！」と数えます。「まだまだグラグラするから、あと2個付けます」と保育者。続けて「全部で何個？」と聞くと、子どもたちから、「5個！」と答えが返ってきました。「今度はテープを・・・」と言いかけると、数人の一年生が、「縦に付ける」「前にしたことある」と、声を上げました。保育者は、「よく覚えてるね。そう、縦に付けます」と説明を続けます。ひもの付け方を説明する場面でも、「穴をあける」「つまようじのとがった方であける」「糸を通す」と一年生が発言し、「わかる人は教えてあげてね。見本も置いてあるからね」と、保育者は皆に呼びかけました。

説明が終わると、子どもたちは、それぞれのグループの場所に移動しました。一年生は、「教え合うために、グループにした方がいい」「一年生だけで固まらず、幼稚園生の間に入った方が教えやすい」などと、事前に話し合っており、園児と一年生が交互にすわり、円になって凧作りが始まりました。

作っている途中で、「テープ回してよ」という声がしました。それを聞いた一年生は、順番を待つ次の人にテープの切り口を向けて回します。続けて、園児が切り、同様に切り口を次の人に向けました。「一、2、3、4、あと一個」と数えながら、テープを5つ、まとめて切っている子どももいます。

「できない。どうしたらいい？」「先生、手伝って！」と言う声が聞こえると、様子を見ながら、教師や保育者は、「見本を見てごらん。」「お友達に聞いてごらん。」と一度は返します。そして、子ども同士で教え合う姿を認めたり、見守ったりしています。子どもだけではどうしても難しいときは、傍に行って手伝います。

一年生のA児は、自分の凧は竹ひごの一本をテープで付け、もう一本はビニールの上に置いたままにしながら、テープを貼るのに手間取っている隣の園児Bを見ています。そして、「どっちからする？」と声をかけ、そっと手を添えます。竹ひごの付け方がわかったB児は、自分でテープを貼り終えると、貼ったところを指で押さえながら、「一、2、3、4、5」と数え、5箇所貼ったことを確かめると、うなずきました。続けて、自分で縦にテープを貼る次の作業を終えました。でも、その後のつまようじでビニールの左右に穴をあけ、そこに凧糸を通す作業になると、なかなかできません。それをじっと見ていたA児は、「穴を通すの難しいね」と、一緒にし始めました。B児も手でビニールを押さえています。その後、やっと2か所に穴をあけ、そこに糸が通り、共同作業が終わりました。笑顔で「やっとできる」とつぶやくと、A児は自分の凧作りに戻りました。

全員の凧ができ上がると、外での凧あげが始まりました。前日に降った雪の影響で、地面は緩んでいましたが、子どもたちは、自分で作った凧を手に、「ほら、見て！見て！あがったよ！」「こんなに高くあがったよ！」と言いながら、校庭を走り回りました。

終わりの会では、一年生も園児も話したい数人の子どもが前に出て、感想を発表しました。その後、それぞれ、教室と園に戻って、振り返りをしました。

一年生の振り返りの場では、「凧の棒を支えた」「糸を通すのを手伝った」「幼稚園生が近くで凧をあげていたから、絡まらないように違うところでしたよ」などと感想が出されました。

園での振り返りの場では、「凧があがって楽しかった」「走ったら、凧があがった！」と、凧あげについての感想がたくさん出されました。保育者は、「凧あげが楽しかったんだね。じゃあ、作るときはどうだった？」と問いかけます。「一年生に教えてもらってうれしかった」「ひものところが難しかったから、手伝ってもらった」など、子どもたちは口々に言いました。「一年生ってやさしいね。」という保育者に、「うん！やさしかった！」と応えます。「穴をあけるのが一年生は上手だった」「そうそう、一年生は上手だった」と他の子どもたちも話します。「本当に一年生は上手だったね」と言う保育者に、「でも、棒のところは自分でできたよ」「一年生のを手伝ったよ」と数人の子どもが話します。保育者も、「そうだね。みんなも先生のお話をよく聞いて上手に作っていたよね」と認めます。その後、「また、凧あげしたいね」とみんなで話し、翌日からも凧あげを楽しむ姿が見られました。

この日で今年の交流会（全3回）は終わりです。来年は、今日のことを思い出して、今度は一年生になった子どもたちが、園児に寄り添う姿が目に浮かびます。

＊━━は、「自立心」につながる一年生の姿
＊━━は、「社会生活とのかかわり」につながる一年生の姿

自立心・社会生活とのかかわり
保育者や教師の援助・環境構成のポイント

- 互いのねらいや留意点等を共有したり、今後や来年度の見通しをもったりできるように、幼小の教職員同士で、事前・事後の話し合いをもつ（別添『南部幼稚園・南部小学校交流活動計画』参照）
- 安全に作業ができるように十分な広さのあるスペースを確保
- 凧を作成する見通しがもてるように、見本を提示し、作成の手順を確認できるようにする
- 子どもたちの目的が実現できるように、また、子ども同士で考え合ったり、教え合ったりできるように、保育者や教師は、見守る、様子を見ながら言葉をかける、手伝うなどする
- 思いや気付きが共有できるように、幼小それぞれでも、振り返りの場を設ける

事例から見られる１０の育ち
自立心

保育者や教師の話、自分の知っていることを伝えようとする一年生の発言をよく聞き、できることは自分の力で行い、凧を作り上げようとしている。また、難しいときには、自分から、「どうしたらいい？」「手伝って」と伝え、一年生や友達の力を借りたり励まされたりしながら、難しいことでも自分の力でやってみようと試みている。そして、自分で作り上げた凧があがったことにうれしさと満足感を感じている。このような体験が、小学校以降の自分でできることは自分でしようと積極的に取り組んだり、わからないことや難しいことは、教師や友達に聞きながら粘り強く取り組んだりする姿につながっていくと思われる。

事例から見られる１０の育ち
社会生活との関わり

一年生や他の園児と触れ合う中で、共に活動する楽しさを味わっている。また、次の人が使いやすいようにテープの切り口の向きを変えて渡す、そっと手を添える、「穴を通すの難しいね」と言葉をかけるなど、相手の気持ちを考えて関わる一年生の行動から、そのよさに気付き、うれしさや親しみを感じるとともに、自分もこうなりたいという憧れの気持ちをもっていると思われる。

このような体験が、相手の状況や気持ちを考えながらいろいろな人と関わることを楽しむ姿につながっていくと考える。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

- 数量・図形への関心・感覚
- 協同性
- 言葉による伝え合い
- **自立心**
- **社会生活との関わり**

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

＊本シートは、竹田市立南部幼稚園（市町村幼児教育アドバイザー在籍）と同南部小学校の交流活動及びその事後の話し合いに、県幼児教育スーパーバイザーが参加し、作成したものです。